本間賢次郎 ケンジロウ

市政レポート No.73

「テレコムタウン構想」から、川崎の未来へ



↑郵政省通信政策局地域通信振興課
「21 世紀の街 テレコムタウン」『OHM』（平成 5 年 12 月）より

かつて日本には、「テレトピア構想」や「テレコムタウン構想」といった、情報通信を活用した新しい地域社会や都市のあり方を描く先進的な構想がありました。

昭和58年には、ケーブルテレビ、ビデオテックス、データ通信などを活用して地域の情報化を促進し、地域社会の活性化を図る「テレトピア構想」が提唱されました。

そして昭和63年には、広域情報圏の中枢・中核都市の開発拠点に高度な情報通信基盤を先行的に整備し、情報化を通じて多極分散型国土の形成を図る「テレコムタウン構想」が提唱されました。

当時すでに、情報通信を都市の基盤として位置付け、情報ネットワークを活用して人々の暮らしや産業、都市のあり方そのものを変えていくという、未来の都市像が描かれていたのです。

しかし、その後のバブル崩壊による経済の低迷や社会のニーズの変化などにより、こうした取り組みは次第に下火となり、国内での事業は縮小していきました。

日本は、決してデジタル化の必要性に気付いていなかったわけではありません。

むしろ、早い段階から情報通信を活用した社会や都市の姿を描いていたにも関わらず、その後の時代の変化の中で、政策の優先順位を見誤ることとなったのです。

それから約30年。

コロナ禍を契機として社会全体のデジタル化が急速に進み、同時に、脱炭素化や環境問題への対応等、持続可能な次世代型の都市づくりが求められる時代となりました。

かつて「テレコムタウン構想」が描いた、情報通信を活用して都市や社会のあり方を変えていくという考え方は、いま改めて重要な意味を持っています。

私は、過去のこうした経験を踏まえ、情報通信やデータを活用しながら、産業、環境、そして人々の暮らしを一体的に考える、次世代の都市づくりが必要だと考えています。

今、求められるのは「スーパーシティ構想」

その中で、私が取り組んでいるのが「スーパーシティ構想」です。

スーパーシティは、AIやデータなどの先端技術を活用し、行政、交通、医療、エネルギーなど、さまざまな分野を横断して、これからの都市や社会のあり方そのものを変えていこうとする取り組みです。

私にとって、この構想は、かつて描かれた「テレコムタウン構想」の理念を、現代の技術や社会環境の中で発展させていくものとして、大きな意味を持っています。

かつて描かれた「未来のまち」を、今の技術と社会の力で、次の時代へつなげていく。

それが、私がスーパーシティ構想に取り組む理由の一つです。

川崎だからこそできる、次世代の都市づくり

そして、その実現を考えたとき、川崎市には大きな可能性があります。

とりわけ臨海部には、国内有数の産業集積があり、羽田空港にも近接しています。

産業、エネルギー、物流、研究開発など、さまざまな機能が集積する川崎の強みを活かすことで、デジタル技術やデータを活用した新たな都市・産業の姿を創り出すことができます。

私はこれまで、こうした川崎の持つポテンシャルを最大限に活かし、次の時代を見据えた都市づくりに向け、議会でさまざまな提言を行ってきました。

そして今、川崎臨海部では、これまで培われてきた産業基盤を次の時代へつなぐ、新たな動きが始まっています。

GX戦略地域の第1弾として、全国で初めて認定

令和8年9月、川崎市の臨海部が、国のGX（グリーントランスフォーメーション）戦略地域における「コンビナート等再生型」の第1弾として、全国で初めて認定されました。

これは、川崎臨海部が持つ産業集積やエネルギー関連の基盤などを活かしながら、脱炭素化と産業競争力の強化を両立させ、次世代の産業拠点へと転換していく取り組みです。

テレコムタウン構想から、スーパーシティへ。

デジタルとGX、産業と環境、そして人々の暮らしを結びつけた、次世代の都市づくり。川崎には、それを実現できるポテンシャルがあることは間違いありません。

私は、これまで積み重ねられてきた都市づくりの知恵と経験を活かしながら、川崎の持つ可能性を次の時代へつなげて参ります。

ツナジロウのひとこと

昔に描かれた「未来のまち」が、今の技術で、さらに進化できる時代に！
川崎のポテンシャルを活かして、次の時代に誇れる都市づくりを！



未来へ働き続ける、想いを「ツナ」ぐ。
イメージキャラクター：本マグロ ツナジロウ